

市民病院だより

頭の健康を考える (第2回) 危険な頭痛

脳神経外科医師 田淵 和雄

今回は第2回「危険な頭痛」をご紹介します。

Q：頭痛の中には命にかかわる危険な頭痛があるそうですが、その頻度は高いのでしょうか。

A：頭痛は、ほとんどの人が経験するごくありふれた症状です。日ごろから慢性頭痛に悩まされている「頭痛もち」の方は、4〜5人に一人とみられています。この慢性頭痛の過半数を占めるのが「緊張型頭痛」、次に「片頭痛」「群発頭痛」と合わせて3割程度です。

これらは、いずれも命の危険はなく、生活習慣の改善や有効な薬で治療できますが、統計では、頭痛を訴えて医療機関を訪れる5〜6%の方に危険な頭痛があるとされています。

Q：危険な頭痛の種類と特徴を教えてください。

A：危険な頭痛には、くも膜下出血や脳出血、脳梗塞、髄膜炎、脳腫瘍、慢性硬膜下血腫などがあります。

いずれも頭の中の病気が原因で生じ、生命に直接関わる頭痛のため、手術など適切な治療が必要となります。

「今まで経験したことがない強い頭痛」「発熱、手足のしびれ、あるいはけいれんを伴うような頭痛」「意識がもうろうとなる頭痛」などいつもと違う頭痛を感じたら、すぐに医療機関を受診してください。

Q：代表的な危険な頭痛について少し詳しく教えてください。

A：くも膜下出血は、脳の血管にできた瘤(動脈瘤)が突然破裂(後頭部をいきなりバットで

殴られたような激しい頭痛)して発症します。

その際、出血が多いと意識混濁や手足の麻痺も起こります。

脳梗塞は、脳の血管が塞がり、手足の麻痺が生じたり、脳の腫れが酷くなると頭痛も強くなってきたりします。

一方、脳のできもの(脳腫瘍)の場合、頭全体が張ったような頭痛が日増しに強くなり、特に朝方に強く、頻回の嘔吐を伴うことも珍しくありません。また高齢者が軽い頭部打撲後、数週間してから頭痛を訴えるようになり、次第に手足の麻痺や認知症をきたすような場合は、まず慢性硬膜下血腫が疑われます。

これらの病気は治療が遅れると生命の危険が高く、場合によっては重い後遺症を残す可能性があるため、早期の診断と適切な治療が必要です。

Q：くも膜下出血は、若くても罹るのですか。また、発症頻度は多いのでしょうか。

A：最も発症しやすい年齢は50歳代ですが、30歳代であって

も、高齢者であっても発症します。どちらかといえばやや女性に多く、脳に動脈瘤があっても多くの場合、自覚症状はなく、破裂して初めて動脈瘤があったことが判明するのがこの疾患の厄介なところです。

発症頻度は、脳動脈瘤があっても必ず破裂するわけではなく、一生破裂することなく天寿を全うする人もおられます。人口当たりの年間破裂率は、日本では人口10万人当たり年間20人前後の発症数だと考えられています。

誰でも経験する頭痛ですが、少しでも先に述べたことが思い当たるような場合には、躊躇することなく医療機関を受診してください。



時間外受診をされる方へ

急病などでの時間外受診の場合は、まず電話で宿日直医師の担当診療科を問い合わせ、来院してください。

【問合せ】小城市民病院 ☎ 73・2161 ホームページ・アドレス <http://www.city.ogi.lg.jp/hospital/>